

ホーソーンの“Wedding Knell”の「時」について

長岡政憲

ホーソーンの *Twice-Told Tales* の中の短篇で、“Wedding Knell”『婚礼の葬鐘』という実に奇妙な作品がある。この作品は1835年に *Token and Atlantic Souvenir* に掲載されたものが、さらに1837年、*Twice-Told Tales* に収録されたとなっている⁽¹⁾。この作品はホーソーンの作家としての修業時代のもので、年老いた男女が結婚式を挙げるのに葬式の鐘を鳴らし、華々しいお祝いの席で着飾った新婦の前に、新郎がこともあろうに葬式の死の装束、つまり経帷子を着て教会に到着するという、まさに奇妙な趣向を強行しようという狂気じみた設定である。この年老いた花婿の奇行の背景にある言葉には、実はホーソーンのピューリタニズムに見られる、earthly と heavenly のテーマが色濃く描かれていると思われる。この小論では、“Wedding Knell”を通して、ホーソーンの他の作品との関連の中で、earthly と heavenly のテーマを考察してゆきたい。

この話は作者ホーソーンの祖母の若い頃、ニューヨークのある立派な教会で彼女が見た、風変わりな結婚式についてホーソーンに語っていたというのである。もちろんその教会の名前や場所についてホーソーンは定かにしてはいない。花嫁は二度の結婚を終えた老婆で、花婿の方は若い頃にその女性を好きになり婚約したが、ある事情で彼女に婚約を破棄されることになり、40年間独身を通じ、65歳になっている。ホーソーンはこの独身の語を“celibacy”としている⁽²⁾。つまり40年間の宗教上の禁欲による独身を意味しており、その堅い意志とは裏腹に、このエレンウッド氏は生涯学者としてきたが、彼

の研究は公共の利益や自己の野心にも欠ける、怠惰なものであったとされている。彼の人物については、

In truth, there were so many anomalies in his character, and though shrinking with diseased sensibility from public notice, it had been his fatality so often to become the topic of the day, by some wild eccentricity of conduct, that people searched his lineage for a hereditary taint of insanity⁽³⁾.

と書かれている。

年老いた未亡人で花嫁となる女性は最初の結婚で自分より二倍も年上の男と結婚し、立派な妻となったが、その夫の死で大変な遺産を受け継いだ。その後彼女より若い南部の紳士が彼女の夫となり、チャールストンで不愉快な長い年月を過ごした後で再び夫に死に別れた。二度目の結婚では夫が不親切なために、夫の死と自分の慰めを結びつけることになった。このダブニー未亡人は自分の幸せとなるべきもの全てがはずれたが、残されたものを活用しようという、賢いが実に可愛くない女だとされている。しかし子供のいない彼女の可愛い愚かさというものは、年老いて醜くなるのを嫌がり、若い娘の赤みがかった顔色を保って、「時」の流れと闘っていた。

この世間に未練を持つダブニーと、世間とは離れて生きてきたエレンウッド氏との結婚式が近づいてきた。世間の人々は皆この二人の結婚は、ダブニーからの働きかけによるものだと思っているようであった。また人生のさまざまな困難を通過した後、昔の恋人同士が晴れて夫婦になれるロマンスと感傷を想像する者もいた。

結婚式が監督派教会の公開の形式で執り行われる日が来た。教会の回廊、棧敷席や祭壇の前の通路も見物人で溢れていた。両家の人々はそれぞれ別々に教会に集まることになっていたが、ある都合のため、花婿側の人々が花嫁側より遅れて来ることになっていた。花嫁側の人々が何台かの馬車で到着し、

教会の入り口に入ってくると、花嫁以外の若い人々の若さと陽気さで晴れやかな雰囲気となり、教会を舞踏会場と間違えるかの如くである。花嫁の足が教会の入り口に触れた瞬間、その時頭上の教会の鐘は結婚式に鳴る“ring”ではなく、重々しい葬式の鐘の響きである“toll”だったのだ。花嫁側の参列者たちは教会の入り口の混雑の雰囲気のため、この葬式の鐘を気にも留めなかった。従って豪華で輝かしい結婚式用の衣装を凝らし、教会の中を絵のように明るい色彩で飾り立てたのであるが、ホーソーンは皮肉にも、

But by what perversity of taste, had the artist represented his principal figure as so wrinkled and decayed, while yet he had decked her out in the brightest splendor of attire, as if the loveliest maiden had suddenly withered into age, and become a moral to the beautiful around her!⁽⁴⁾

として、花嫁の年老いた醜い顔が、煌びやかな衣装を着ているおぞましい姿であるとしている。この花嫁をホーソーンは“monster”として印象づけていると思われるのである。晴れやかな行列の人々は更に前に進み、教会の中を明るく輝かせている時、再び葬式の鐘が鳴り、目に見える形でこの輝かしい光景を暗い薄闇でもやのように包んでしまった。すると今度は列席者たちが混乱し始め、ざわめきひどく動揺した。その様子は、

Thus tossing to and fro, they might have been fancifully compared to a splendid bunch of flowers, suddenly shaken by a puff of wind, which threatened to scatter the leaves of an old brown, withered rose, on the same stalk with two dewy buds; such being the emblem of the window between her fair young bridemaids⁽⁵⁾.

として、老婆である花嫁は儂くも散り落ちる枯葉の象徴であると描かれている。

しかしこの老新婦はその弔いの鐘が鳴り響いている最中、勇ましく行列の先頭に立ち、祭壇にいる牧師に、

… ‘But so many weddings have been ushered in with the merriest peal of the bells, and yet turned out unhappily, that I shall hope for better future under such different auspices’⁽⁶⁾

と語りかけた。すると当惑しながらもその牧師は、かの有名なテイラー主教が結婚式に語る説話を持ち出し、主教は結婚式の式場そのものを暗くし、結婚式の衣装を棺を覆う棺衣から切って作るようであり、人間は必ず死ぬことと将来の悲哀を考えて、人生における死を心に刻むために、様々な国の習慣で、結婚式に悲しい事柄を組み入れているというのである。従ってこの弔いの鐘から、悲しくも人生に益となる教訓を引き出そうと牧師は語った。この未亡人は一瞬教会の窓の外を見て、まるで最初の夫の墓、ついで二度目の夫の墓の方へ視線を向けているようであったので、二人の埋葬された男達が自分のところへ来て、一緒に眠ってくれと彼女の耳元に遠くから叫んでいるように彼女は思ったのである。

しかし一瞬真実な思いとして、もし最初の恋人と幸福な人生を送った後で、彼女の葬式の鐘が今や鳴り、そして長い間連れ添った後、その夫の昔からの愛情によって墓に伴われて行くならば、自分の運命はなんとより大きな幸せとなっていたことだろうなどと考え巡らすのである。このダブニー未亡人はそのために自分の人生の終わり近くになって、自分の最初の恋人に思いを寄せたのであるが、ホーソンは“*But why had she returned to him, when their cold hearts shrank from each other's touch!*”⁽⁷⁾と読者に問いかけている。若い頃に結ばれなかった恋しいという思いというものは、永遠に人の心に残っているのであろうか。

死の鐘は再び悲しみに満ちて鳴り、祭壇では花嫁が花婿を待っている間、何台かの馬車を連れた霊柩の馬車が、死人を教会の墓地に運ぶためにやって来たという人々の囁きが広まった。すると花婿と友人たちの足音が教会の入り口で聞こえた。花嫁は側にいる付き添いの若い娘の腕を強く握りしめながら、自分の花婿は、花婿付添人として死んだ二人の夫を連れてくるような気がする、とおのきながら若い娘に囁くのである。すると黒い集団の行列が教会の中に入ってきて、先頭には葬式の喪主のように、頭から足の先まで真っ黒の正装で杖をついた老人と老婆が入ってきて、その後と同じような衣をまとった年老いた夫婦たちが続いていた。彼らは花嫁の昔の友人たちで、彼らの皺や病気の姿を見せながら、まるで彼らの古い墓から出てきたかの如く、花嫁にあんたも葬式の経帷子を用意するようと言わんばかりである。若い時には一緒に踊りながら、何日も楽しい夜を過ごした仲間達である。この時老いた花嫁の気持ちについて、

And now, in joyless age, she felt that some withered partner should request her hand, and all unite in a dance of death, to the music of the funeral bell.⁽⁸⁾

と述べられている。いよいよ結婚式が死者の葬式に切り替えられていくのである。

この老人達の行列が祭壇に近づき、それぞれの老夫婦は別々に離れていくと、吊いの鐘と葬式の舞台の中で、経帷子を着た花婿は現れたのである。ホーソンは結婚式の花婿について次のように描いている。

No garb but that of the grave could have befitted such a death-like aspect; the eyes, indeed, had the wild gleam of a sepulchral lamp; all else was in the stern calmness which old men wear in the coffin. The corpse stood motionless, but addressed the widow

in accents that seemed to melt into the clang of the bell, which fell heavily on the air while he spoke.⁽⁹⁾

そして墓場の明かりのような荒涼とした眼で、死人のように年老いた花婿は青白い唇から花嫁に声をかけたのである。

“Come, my bride !” said those pale lips. “The hearse is ready. The sexton stands waiting for us at the door of the tomb. Let us be married; and then to our coffins !”⁽¹⁰⁾

花嫁は恐怖のため、死人のような花婿と同じように、ぞっとするような死者の顔つきになったのであり、その場に居た花嫁の若い友人たちは身震いして立っていた。ここでホーソーンは、華やかな結婚式には全く相応しくないこの人生最後の死の光景が、実は人間の生涯の重要且つ、本質的な“mortality”と如何に密接に関わっているかを導入し始めるのである。

…; the whole scene expressed, by the strongest imagery, the vain struggle of the gilded vanities of this world, when opposed to age; infirmity, sorrow, and death.⁽¹¹⁾

とホーソーンは述べている。

この畏敬に包まれた沈黙をこの教会の牧師が破ることになり、経帷子姿の新郎に落ち着かせるように語りかけた。それは花婿のエレンウッド氏は気分が良くないようだから、一旦は自宅に帰るように諭そうとするのである。それに対し花婿は、

“You deem this mockery; perhaps madness. Had I bedizened my aged and broken frame with scarlet and embroidery——had I

forced my withered lips to smile at my dead heart—that might have been mockery, or madness.”⁽¹²⁾

として、どちらが正気でどちらが狂気だったか、正気の筈の牧師に強く反論したのである。更に死者の顔つきをした新郎は幽霊のような動き方で、煌びやかな花嫁衣装の花嫁の側にとっても簡素な経帷子姿で並んだ。それはまさに人生の縮図であり、人生の表面と裏面の対照をなしているために、ホーソーンは、“None, that behold them, could deny the terrible strength of the moral which his disordered intellect had contrived to draw.”⁽¹³⁾としている。この時花嫁は心を引き裂かれて、‘Cruel, cruel!’⁽¹⁴⁾と叫びたのに対し、花婿の方も、‘Cruel’ と荒々しい乱暴な口調で繰り返した。花婿の言い分とは、どちらが一体残酷であったのかを問い直すものである。若い時、この目の前の花嫁と結ばれる筈であったのに、自分は見捨てられ、自分の幸福、希望や人生の目的を全く奪われ、悲しみと嘆きの現実だけとなり、彼の結婚は夢と化してしまい、残ったものは広がる闇ばかりで、その暗闇を40年間彷徨ってきたのである。更に老いた花婿は、

“But other husbands have enjoyed your youth, your beauty, your warmth of heart, and all that could be termed your life. What is there for me but your decay and death?”⁽¹⁵⁾

として、肉体と精神の長年続いた耐え難い苦悩は、一生取り返しのない拷問の如く、まさに残酷な人生と言わざるを得ないとしている。エレンウッド氏にしてみれば、自分の死を考える今になって、自らの墓を作り、その墓の中で休んで眠りにつこうと思っている頃になって、あれから40年も経過して、年老いた昔の恋人の、ダブニー未亡人がこの教会の祭壇に彼に来るように呼び出したと言う訳である。エレンウッド氏はこの年老いての結婚の意義というものを、自分の長かった生涯を振り返り、時の流れと人生の意味、人生の

青春と老衰と死、mortalとimmortal、あるいはeternityの世界を十分に考え巡らせたことであろう。彼は結婚式を死を迎える葬式の様相に変えるべく、葬式のために友人達を連れて寺男に最も沈痛な葬式の鐘を依頼し、自らは経帷子を着て葬式と同様の有様で、年老いた花嫁と結婚するために、墓の入り口でお互いに手を取り合って一緒に墓に入ろうという、それを二人の結婚の儀式にしようというものである。ホーソーンはこの場の雰囲気について、

It was not frenzy; it was not merely the drunkenness of strong emotion, in a heart unused to it, that now wrought upon the bride. The stern lesson of the day had done its work; her worldliness was gone.⁽¹⁶⁾

と述べており、経帷子姿の死人のように年老いた花婿が、生きること、老衰、死、そして死の意味と死語の未来というものを華やかに着飾った老いた花嫁に悟らしめたというものである。新婦のダブニー未亡人の反応は、

“Yes!” cried she. “Let us wed, even at the door of the sepulcher!
—My life is gone, in vanity and emptiness. But at its close, there is one true feeling. It has made me what I was in youth; it makes me worthy of you. Time is no more, for both of us. Let us wed for Eternity!”⁽¹⁷⁾

として、エレンウッド氏の教訓に答え、彼の最初で最後の花嫁に相応しい思いの中で、ダブニー未亡人は弔いの結婚式を喜んで承諾したのである。すでに死骸ようになったエレンウッド氏の凍てついた胸から、人間らしい熱い感情のほとぼしりが不思議にも表れ、彼は花嫁を見つけていたが、愛おしさがこみ上げ花婿は経帷子で涙を拭いたのである。花婿は次のようにまとめたのである。

“Beloved of my youth,” said he, “I have been wild. The despair of my whole lifetime had returned at once, and maddened me. Forgive ; and be forgiven. Yes; it is evening with us now; and we realized none of our morning dreams of happiness. But let us join our hands before the alter, as lovers, whom adverse circumstances have separated through life, yet who meet again as they are leaving it, and find their earthly affection changed into something holy as religion. And what is Time, to the married of Eternity ?”⁽¹⁸⁾

として、教会において、花婿の結婚式と葬式における人生共通のメッセージが語られたのである。“Time”とはひとりの人間の誕生から、幼年そして長い年月を経て老年になって死を迎えるまでの「時」を指しており、一方で、“Eternity”の世界へ旅立つための結婚であれば、この地上の“mortal”な世界の「時」と、“immortal”な世界の「時」は、全く次元の異なる世界の「時」である筈である。ホーソーンは、この結婚式をこの世の地上的な希望を葬り去るための葬式だとしている。つまり老い萎びた会葬者の行列、経帷子を着た白髪の花婿、年老いた花嫁の青白い顔、あたり一面に響き渡る吊いの鐘、そして結婚の祝辞を圧倒する鐘の音、それら全てがこの世での様々な希望を埋葬することを知らせる儀式となり、鐘の音であるというのである。それは人のこの世の罪の埋葬を意味する水のバプテスマを象徴していると思われる。ホーソーンは、二人の老齡の結婚は、肉体を離れた魂の結婚であるとして、

Amid the tears of many, and a swell of exalted sentiment, in those who felt aright, was solemnized the union of two immortal souls. The train of withered mourners, the hoary bridegroom in his shroud, the pale features of the aged bride, and the dead-bell

tolling through the whole, till its deep voice overpowered the marriage words, all marked the funeral of earthly hopes. But as the ceremony proceeded, the organ, as if stirred by the sympathies of this impressive scene, poured forth an anthem, first mingling with the dismal knell, then rising to a loftier strain, till the soul looked down upon its woe. And when the awful rite was finished, and, with cold hand in hand, the Married of Eternity withdrew, the organ's peal of solemn triumph drowned the Wedding Knell.⁽¹⁹⁾

と結んでいる。この全く奇妙としか言えない老花婿と老花嫁の結婚式と葬式、人生の喜びと悲しみを一つに兼ねたこの儀式に対し、ホーソーンは人生最期を迎える老いた花婿と花嫁に、人生の勝利宣言をさせているのである。年老いた新婚夫婦が、許し許され、冷たいとは言え手を取り合いながら、“Eternity”の世界への旅立ちに向かうとき、“Time”のearthly(地上的)な意味とEternity(天上的)な意味をわきまえながら、過去の悲哀を忘れ、厳かなオルガンの勝利の音と共に、幸せな絆を結んで一緒に棺の中に入っていく結末となっている。ホーソーンは奇怪な葬式の死の様相で老人二人の人生最後の結婚式を、祝福された人生教訓の場に変えたかったものと思われる作品である。

注

- (1) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*, (Boston: G. K. Hall & Co, 1979), p.319.
- (2) Nathaniel Hawthorne, *Twice-told Tales*, ed. William Charvat and Others, (Ohio State University Press, 1974), IX, p.28.
- (3) *Ibid.*, p.28.

- (4) *Ibid.*, p.31.
- (5) *Ibid.*, p.31.
- (6) *Ibid.*, p.31.
- (7) *Ibid.*, p.32.
- (8) *Ibid.*, p.33.
- (9) *Ibid.*, p.34
- (10) *Ibid.*, p.34.
- (11) *Ibid.*, p.34.
- (12) *Ibid.*, p.34.
- (13) *Ibid.*, p.35.
- (14) *Ibid.*, p.35.
- (15) *Ibid.*, p.35.
- (16) *Ibid.*, p.35.
- (17) *Ibid.*, pp.35-36.
- (18) *Ibid.*, p.36.
- (19) *Ibid.*, p.36.

参考文献

- Wagenknecht, Edward, *Nathaniel Hawthorne: The Man, His Tales and Romances*. New York: Continuum, 1989.
- Schubert, Leland, *Hawthorne, the Artist*: New York: Russell & Russell • Inc, 1963.
- Fogle, Richard Harter, *Hawthorne's Fiction: The light & The Dark*. University of Oklahoma Press Norman, 1969.
- Martin, Terence, *Nathaniel Hawthorne*. New Haven, Conn.: College & University Press Publishers, 1965.